



写真-1 千種川左岸から上郡橋を撮影（令和4年5月撮影）

### ■ 平成 16 年災害を契機に架け替えられた上郡橋

上の写真-1 は、二級河川・千種川に架かる一般県道 236 号・上郡停車場線の上郡橋です。この橋から、写真の左手方向に約 650m 行くと山陽本線および智頭急行智頭線の上郡駅です。また、橋の前方、右手に見える山が標高 260m の生駒山です。

この橋は、5 径間連続プレキャスト桁のコンクリート橋で、千種川床上浸水対策特別緊急事業<sup>※1</sup> および交通安全施設等整備事業により架け替えられたものです。千種川が当該地点で約 40m 拡幅改修されることに伴い、橋長 141m、11 径間だった旧橋が、橋長 180.5m、5 径間の橋になり、幅員も 8.0m から 17.0m に拡幅されています。

架け替え工事は平成 17(2005)年度に着手、平成 22(2010)年 12 月 4 日に開通式を執り行い、その日に供用開始されています。

右の写真-2 は、生駒山（標高 260m）の中腹から上郡橋を撮ったもので、手前の建物が上郡町役場です。



写真-2 生駒山中腹から千種川に架かる上郡橋を撮影

※1 千種川床上浸水対策特別緊急事業：平成 16（2004）年 9 月台風

21 号による浸水被害を受けて再度災害防止対策として事業化されたもので、平成 18（2006）年度から 24（2012）年度にかけて実施された。事業区間は、上郡町竹万～同町大枝新の延長 3.2km。

## ■ 上郡中学校跡地に移設された「大橋供養塔」

隈見橋(くまびし)西交差点近くの上郡中学校跡地に「大橋供養塔」があります。元々千種川の右岸堤防上にありましたが、千種川床上浸水対策特別緊急事業による拡幅に伴い移設されることに。平成 21 (2009) 年 4 月上郡中学校が同じく改修に伴い上郡駅より南西へ約 1.5km の現在地に移転したことから、その跡地(残地)に供養塔が移設されています。

供養塔の横に上郡町教育委員会の説明板があり、そこには概ね以下のようなことが記されています。

江戸時代、千種川には橋が架けられていなかったため、渡河にはもっぱら渡し舟が利用されていました。天保 10 (1839) 年、上郡村<sup>※2</sup>の町屋衆によって、現在の本町下の河原にあった渡船場付近から右岸の大持村(だいもちむら)方面に大橋が架けられ、そのことを記念して石造の供養塔が建てられました。

供養塔の高さは約 2.3m で、笠と棹石(さかいし)が角石三段積の上に載っています。棹石の正面には大橋の守護を祈って「南無阿弥陀仏」、裏面に「天保十己亥歳四月」、完成の喜びを詠んで左側面には亀仙の「霞む日や幾度通る橋のうへ」の句、右側面には佑義の「はれやらぬ虹かと思ひすみ渡る月の隈見の河の長橋」の短歌がそれぞれ刻まれています。



写真-3 大橋供養塔

「亀仙」とは架橋を進めた町屋衆のひとり、上郡村庄屋・西脇加三郎<sup>※3</sup>の俳号で、「佑義」とは山野里村庄屋・長治(ちようじ)理兵衛<sup>※4</sup>の雅号です。二人とも近世の上郡を代表する文化人です。

台石中段には、橋催主の加三郎(亀仙)と同(竹内)武太夫、年寄治右衛門、世話人の丸屋和平、高瀬屋長八、大工屋甚太夫、後見の木屋(西脇)巳之輔、木屋(西脇)九兵衛の名が刻まれています。

この大橋は、6 年後の弘化 2 (1845) 年の洪水で流され、翌弘化 3 (1846) 年 5 月 11 日に架け直されたものの、その後については不明です。

明治 33 (1900) 年に上郡橋(木橋)が架けられ、千種川兩岸の交通の便は改善されました。

ここで架橋費用の負担について気になる点があります。上記説明の中で「上郡村の町屋衆によって大橋が架けられ……」とあり、架橋費用のすべてを左岸側の上郡村が負担しているように読み取れることです。この点について『上郡町史』に興味深い話があります。それは、渡船新造の費用負担に関する以下のような記述です。

「上郡村では明治 15 (1882) 年 3 月に渡船 1 艘を新造している。備前牛窓村(現・岡山県瀬戸内市)に発注、新造船の代金は諸費用を含め約 95 円。この費用負担は、3 割が「川向反別」割(渡船を利用する受益者が川向うに所有する土地面積の比率で負担すること)、4 割が「惣地租金」割(地租は土地を対象に賦課された租税)、残り 3 割が「等級」割(貧民は免除)で徴収された。」

この渡しは、右岸の人も渡し賃を払って利用できますが、造船に係る費用は上郡村がすべて負担したようです。

この点について上郡町郷土資料館の方にお訊きすると、「以前、山野里村の方に聴き取りしたところ、金額は不明ですが大橋架橋費の一部を負担していたと聴いている」とのことでした。

この大橋は既述のとおり架橋の 6 年後に洪水で流失してしまいますが、それまでの 6 年間、千種川兩岸の人々が何不自由なく行き来でき、地域間の交流が促進されたのは間違いありません。

※2 上郡村：明治 22 (1889) 年 4 月 1 日、町村制施行により、上郡村・井上村・大持村・山野里村・竹万村の区域をもって上郡村が発足。大正 2 (1913) 年 4 月 1 日、上郡村が町制施行して上郡町となる。昭和 30 (1955) 年 3 月 25 日、上郡町が高田村・鞍居村・船坂村および赤松村の一部(荅縄・大枝・大枝新・岩木・柏野・細野・赤松・河野原・楠木および旭日の一部)と合併し、改めて上郡町が発足。



図-1 大橋位置図

※3 西脇加三郎：寛政7（1795）年～明治3（1870）年。酒造業玉木屋の二代目で俳人。上郡村庄屋として天保10（1839）年・弘化3（1846）年の架橋に尽力した。

※4 長治理兵衛：明和7（1770）年～天保14（1843）年。三木城主・別所長治の子孫で、長治姓を名乗り代々庄屋を務め、山野里村の名家として知られていた。庄屋の傍ら各地の名所旧跡を訪れ、多くの歌人と交流。歌集編纂にも関与した歌人。

### ■ 弘化3年に架け直されて以降の大橋は・・・

明治6（1873）年に作成された上郡村絵図（『上郡町史』第四巻）や、明治28（1895）年と明治30（1897）年に測図された国土地理院の地図に橋は見られず、この頃の千種川の兩岸を結ぶ交通機関はもっぱら渡しだったようです。つまり、流失した大橋は翌年に架け直されたものの、その後また流失し、以後舟渡しが橋の代用をする状態が明治33（1900）年の上郡橋架設まで続いたと思われる。その渡し賃は3文だったそうで、「2束3文」と言われるくらいなので安かったのでしょう。河畔には宿屋や飲食店があって賑わっていたとか。

明治時代の千種川右岸は田野が広がっていました。一方、左岸側は千種川と並行する因幡街道の両側に集落が展開し、当時の地域の中心は左岸側の旧上郡村だったようです。

### ■ 山陽鉄道の開通により上郡駅が地域の中心になる

明治34（1901）年5月27日に山陽鉄道（現・JR山陽本線）の神戸～馬関（現・下関）間が全通しますが、それより前の明治23（1890）年12月1日に有年～三石間が開通し、これにより三石駅から神戸駅までが1本の線路で繋がりました。ただ、この時点では上郡に駅を設置する予定はなく、偶々帰郷中だった大鳥圭介<sup>※5</sup>が地元の要望を受けて明治26（1893）年9月18日、兵庫県知事・周布公平に上郡村への新停車場設置を請願、これが功を奏して明治28（1895）年4月4日に上郡駅が新設され旅客・貨物の取り扱いを開始します。

当時の上郡駅周辺は田んぼばかりでしたが、やがて地域の交通の中心になります。同年5月に内国通運株式会社上郡取引店が開業し、千種川の舟運と鉄道輸送を連結させる役割を担います。それに関連して取引を進めていく上に必要な金融面の役割を担う上郡銀行が同時期に発足し、地元の資産家である西脇儀兵衛が頭取に就任しています。

※5 大鳥圭介：天保4（1833）年～明治44（1911）年。江戸時代後期の幕臣、医師、蘭学者、軍事学者、工学者、思想家、発明家。明治時代の教育者、政治家、外交官、官吏。赤穂郡赤松村（現・上郡町岩木）に村医者の息子として生まれる。戊辰戦争後に入牢するが黒田清隆の尽力で赦免され明治政府入り。明治10（1877）年、工部大学校（東京大学工学部の前身）の初代校長となる。外交面では、陸奥宗光の後ろ盾で清国朝鮮国駐劄（ちゅうさつ）公使として壬午（じんご）事変、甲申（こうしん）事変により関係が悪化した清国の袁世凱（えんせいがい）と交渉。学者としては、江戸で松本良順と交流しコレラの治療法を研究。

### ■ 明治33年に上郡橋（木橋）が架設される

当時の地域の中心地だった旧上郡村と千種川右岸側の地域を結ぶとともに、上郡駅へのアクセスとして、明治33（1900）年に橋長65間（≒118m）の上郡橋（木橋）が架けられました。

明治41（1908）年に発刊された『赤穂郡誌』に、上郡村の橋梁として千種川に架かる上郡橋、鞍居川に架かる鞍居橋、安室川に架かる山野里橋の3橋が記されていて、上郡橋については「上郡駅ヨリ北佐用郡ヲ経テ因幡二通スル県道 千種川ニ在リ明治三十三年ノ架設ニシテ長六十五間トス」とあります。

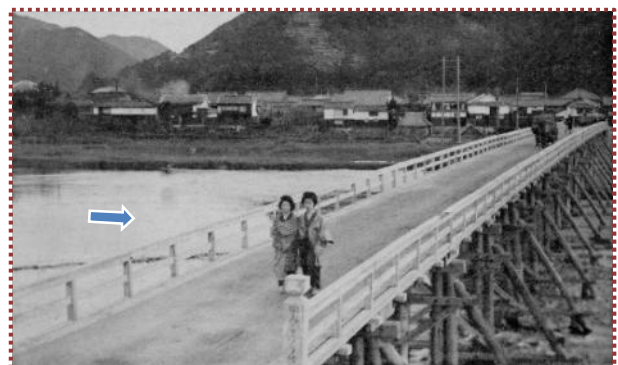


写真-4 上郡橋（木製の親柱は「かみごうりばし」と読める）  
（『ひょうごアーカイブス』からDL）

五つの村が合併して発足した上郡村は、上郡橋の完成によって新しい町がつけられていきました。また、鉄道のなかった山陰地方の人々が、上郡橋や鞍居橋<sup>※6</sup>の完成により山陽方面への最短距離を求めて上郡駅周辺に集まり始めました。

なお、『かみごおり紀行』によると、明治36（1903）年5月20日の神戸又新（ゆうしん）日報に、同月18日「夜来の降雨烈しく千種川の増水六尺（≒1.8m）に及び、上郡橋、苔縄橋（こけなわばし）、赤松橋等孰（いず）れも仮橋流失せり」と

報じられています。上郡橋がその機能を発揮したのはわずか3年間だったということです。

※6 鞍居橋：明治21(1888)年、因幡街道(現・国道373号)が鞍居川を渡る箇所(現・建武橋)に架けられた。橋長45間(≒82m)。

### ■ 大正15年上郡橋が永久橋に

上郡橋が永久橋に架け替えられたのは大正15(1926)年で、竣工式は10月12日に行われています。

11径間単純プレートガーダー橋で、橋長141.04m、幅員5.85mです。

神戸又新日報10月14日の記事には、「前夜来気づかれていた天候も当日はぬぐわれた如き好天候、(中略)12時より上郡橋竣工式場(千種川原)にて竣工式を挙行、この頃よりこの盛儀に列せんとする者老若男女ひしひしと会場に詰めかけ上郡町史空前の出入を見た(以下略)」と書かれていて、町民の永久橋に対する期待の大きさが窺えます。

上郡橋は、昭和41(1966)年3月、既設橋の上流側に11径間単純鋼桁橋を付加、これにより旧橋の幅員5.85mは8.00mに拡幅されました。筆者の記憶にあるのはこの橋です。

さらに平成9(1997)年4月、交通量の増加に伴い橋のすぐ上流側に側道橋(歩道橋)が完成します。橋長150m、幅員は3.5mです。



図-2 上郡橋周辺の地図

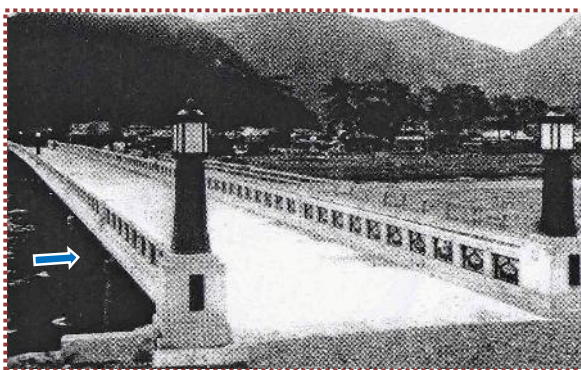


写真-5 大正15年永久橋になった上郡橋  
(『かみごおり紀行』から引用・加工)



写真-6 側道橋完成後の上郡橋  
(上郡橋側道橋橋梁台帳から引用)

### ■ モノローグ

大橋架橋に尽力した上郡村の庄屋・加三郎は、酒造業玉木屋の二代目でした。その玉木屋は初代加三郎が江戸時代後期に創業したもので、幕末の混乱で一時休業に追い込まれますが、明治に入ってから親戚筋である姫路林田の酒造家(ヤヱガキ酒造)の尽力で酒造業と醤油製造業を再興しました。

昭和 12 (1937) 年頃に二つの蔵の醜 (にこりざけ) が全滅する事態を引き起こし倒産、その後株式会社化し西脇酒造と社名も変更して再出発、「寿栄」などの銘柄で知られる赤穂郡内屈指の蔵元となります。

昭和の終わり頃に残念ながら廃業しますが、大正 11 (1922) 年に建てられた東蔵は、今、アートと音楽を楽しむ場・ギャラリー「ひがし蔵」に生まれ変わっています。

筆者は昭和 50 (1975) 年度から 53 (1978) 年度までの 4 年間に上郡土木事務所に勤務していましたが、酒蔵の存在を全く知りませんでした。

51 年災害で超多忙な毎日を送っていたせいかも。

#### 【参考資料】

- 1 『一般県道上郡停車場線「上郡橋」の供用開始について』 西播磨県民局記者発表資料 平成 22 年 11 月
- 2 『むかしの西播磨～絵葉書に見る明治・大正・昭和初期』 藤木明子編著 平成 7 年 4 月
- 3 『ふるさと山野里 文化財散策マップ』 上郡町教育委員会
- 4 『上郡ゆかりの偉人』 上郡町 HP  
<https://www.town.kamigori.hyogo.jp/soshiki/kyoikusomuka/gyomuannai/6/1213.html>
- 5 『かみごおり紀行～町史百話』 上郡町 平成 19 年 3 月
- 6 『赤穂郡誌』 私立赤穂郡教育会編 昭和 48 年 2 月
- 7 『上郡町、上郡町立上郡中学校、上郡駅、山陽鉄道、大鳥圭介、カラスアゲハ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 8 『兵庫史蹟郷土史～赤穂郡の歴史～』 今井林太郎・渡辺久雄監修、松岡秀夫執筆 昭和 52 年
- 9 『写真アルバム 赤穂・相生・上郡・佐用の昭和』 樹林舎 平成 28 年 12 月
- 10 『上郡町史・第二巻本編Ⅱ』 上郡町 平成 23 年 2 月



写真-7 ギャラリー「ひがし蔵」

#### カラスアゲハ (烏揚羽)

アゲハチョウ科のチョウ。北海道から九州まで全土に分布する。本州南部では年 2、3 回発生し、4～9 月頃に見られる。生息域は食草・食樹の生息環境に左右されるため、基本的に市街地にはいない。しかし、食草さえあれば市街地でも見ることができる。幼虫の食草はコクサギ、キハダ、サンショウ、カラスザンショウ、ミヤマシキミ、カラタチなどミカン科の木の葉だが、栽培種のミカン類はあまり好まない。他のアゲハの仲間と比べ飛ぶ速度が遅め。生駒山中腹でモチツツジの蜜を吸っていたところをパシャ！



写真-8 カラスアゲハ

※発行：令和 4 (2022) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.154

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.154